

「汝、その隣人（となり）の家を貪（むさぼ）るなかれ。アーメン。」

「隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない。」（出エジプト記 20:17）

ここでの「むさぼる（ハーマド）」は、奪い取る、みだりに欲しがる、欲情を起こすという意味で、言葉だけの問題ではなく、不正な方法で隣人のあるものを奪おうとする行為全般のことを指していて、さらに人の心の内面まで問われる言葉です。精神的な最初の出発点に差し押さえなければならないほど、重大な危険性を持っています。

聖書には、「だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を捨て去りなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない。（コロサイ 3:5）」

「すべてみだらな者、汚れた者、また貪欲な者、つまり、偶像礼拝者は、キリストと神との国を受け継ぐことはできません。このことをよくわきまえなさい。（エフェソ 5:5）」と書かれていて、貪欲は偶像崇拜と結びつけられています。つまり、「むさぼること」は隣人との関係を破壊するのみではなく、神様の愛に反することであり、神以外のものを神とする偶像崇拜の動機になるのです。ここでの「むさぼり」は倫理的な行為の問題だけではなく、宗教的、霊的などところまで遡る問題です。

使徒パウロは言います。「では、どういうことになるのか。律法は罪であろうか。決してそうではない。しかし、律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったでしょう。たとえば、律法が『むさぼるな』と言わなかったら、わたしはむさぼりを知らなかったでしょう。ところが、罪は掟によって機会を得、あらゆる種類のむさぼりをわたしの内に起こしました。律法がなければ罪は死んでいるのです。（ローマ 7:7,8）」このような戒めの深い内面性のゆえに、使徒パウロは罪の自覚に至りました。そして、「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。（ローマ 7:24）」と嘆くことになったのです。そのくらい「むさぼり」は罪の根源であり、人間自らから抑えることができないほどの深刻な問題です。「そして、むさぼり」は個人だけのことではなく、権力と結びつけられた社会構造的なことも含まれています。私たちにとって「むさぼり」との戦いは、死に至る時まで残存する、絶えないものです。

全身全霊で神を愛し、隣人を愛するようにとおっしゃった主イエスの戒めに生きることこそ、この戒めを守れる道です。十戒は主イエス・キリストにおいて新しくされた者のみが成し得るものです。主に従って生きる者はすべての戒めから自由にされるからです。

アーメン。そのことは真実です。その通りになりますように。

***共に祈りましょう。**

- ・隣人のものをむさぼる誘惑から私たちを守ってください。
- ・神以外のものに心が捕らわれないように、導いてください。
- ・私たちの社会に、弱者を「搾取」し「侵害」することがないように祈りましょう。

※今回で「ショートメッセージ」を終了します。